

## 人間内村鑑三

### ― 福音的人間のヒューマニテイ ―

#### まえおき―内村鑑三の人間的魅力

昨年今井館教友会が公募した「内村鑑三記念懸賞論文」入賞者懇談会の折、若いそのひとりから「審査員諸氏の内村との関わりを一言で」と問われて、私はとっさのことで困惑したが、思わず「福音的人間の魅力」と答えた。

顧みると内村に出会って六十年、私は内村鑑三という人間に魅せられて生きてきた、と言って過言ではない。きょう私は、人物崇拜は信仰上大妨害である。われらは人によるをやめて、直ちに神により頼むべきである（信 23―211）注（1）という内村の忠告に深く心に留めながら、人間内村鑑三に対する私の敬愛、思慕の念と、彼に対する満腔の感謝とを率直かつ切実に表白したいと思う。

なお、「人間内村鑑三」という演題は、尊敬する野村実先生（一九〇一―九六）の名著『人間シュヴァイツェル』（岩波新書 55）を借用したものである。話が個人的になること、引用が多くなることを恐れるが、ご容赦願います。

#### 「福音的人間」の定義とそのキリスト教

「福音的人間」という言葉は、その時不意に私の口を突いて出たもので、他の誰かから聞いたものではない。しかし、それをもって私の内村理解の一語としたのは、次の彼の文章であることは間違いない。そこでまず、その文章を紹介して「福音的人間」の定義としておきたい。（『ロマ書の研究』第五六講「小問題の解決、一四章以下の精神」、「約説」の一部である（注 17―213））。

キリストは神人 God-Man であつた。神と人との両性を一体において持つ者であつた。信者もまたそうである。信者はこの世を全然超越したる、いわゆる聖人ではない。彼に神らしきところがある。同時にまた彼は人らしきところを失わない。彼の最大の心がかりはもちろん天につける事である。されども彼は地につける事を忘れない。クリスチャンは intensely divine（深刻に神らしく）たらんと欲すると同時にまた intensely human（深刻に人らしく）である。天に關し最大の興味をいだくに至りし彼は、地に関し最も熱心なる者である。ヒューマニテイは、地と人との關する熱心である。これを人間味と訳すべきであると思う。Divinity と Humanity 神にかかわる事と人にかかわる事、神学と文学、完全なる人に必ずこの両方面がある。

ここに言う「完全なる人」、あるいは講演筆記部分にへ

天に關しての熱心と地に關しての熱心。この二つが互いに相補つて眞の人が生まれる。(同 208) とある(眞の人)

が、すなわち「福音的人間」である。そして、このような定義を与えた内村こそ、まぎれもない福音的人間であるというのが、きょうの私の話の本旨であり、さらに言えば、これから私が話そうとするのは、その福音的人間のヒューマニティーの方面、端的に内村の人間性、(人間味)についてである。

なお誤解を避けるために、内村は次のようにも言っていることを付け加えておく。(キリスト教はまず第一にデイビニティー(神性)である。しかる後にヒューマニティー(人性)である)(信 9-108)。

では、人間内村はいかなるイエス觀を抱き、いかなるキリスト教を信じていたか。何を今更と思われるかも知れないが、ここに私は、数ある内村の論考の中でも最も(人間味)に溢れた、「文学的」と言ってもよいであろう一篇を引いて、彼自らにこれを語ってもらおうと思う。それは(わたしはキリストをどう思うか *What I Think of Christ* )という英語の論文(道家弘一郎訳、英 373)注(2)で、

『ジャパン・クリスチャン・インテリジェンサー』

誌注(3)に掲載されたものである。内村六七歳の作で、円熟した思想と信仰の表明でありながら、恐らく英文だからでもあるろう、極めて個人的で率直、簡潔で明晰、淡々とした語りなのに甚だ情熱的、不思議な若々しさが読む者に伝

わってくる、内村の真情あふれる信仰告白である。

あなたがたはキリストをどう思うか—マタイ伝二二章 四二節。

第一にわたしはキリストを：：ひとり完全な人間であると思う。彼の完全性は思考やこの世的な活動の領域にあるのではなくて、意志にある。カント的な用語を使えば、キリストは完全に善意の人であった。わたしは彼のなかに罪を見出すことができない。彼は愛し赦すことができた。彼は自分のことは全く考えずもっぱら他人のことを考えた。彼は自分自身を救うことはできなかつた。が、他人が救われるためには自分の命を与えることができた。彼自身の利益がかかわつているときは弱く無力であつたが、他人が危険にあつて滅びそうなきには強い神の子であつた。彼は神の子であつたけれども、自分自身を無きものと考え、もっぱら他人のために生きた。わたしは人類の記録のなかに彼に似たものを見出すことができない。

わたしは彼を知るに至るまでは、人間が何であるかを知らなかつた。彼の本性に關する考察はさておき、一つのことばは日光のように重要で明瞭である。すなわち、ナザレのイエスは人間性の完成であり、ひとりの人間として全く奇跡であり、その完全な人格のゆえに人類の主であつた、ということである。わたしは彼の罪のない生涯について考えるとき、彼の前に膝を屈め、

文字どおり彼に礼拝をささげざるをえない。わたしは、わたしが知る多くの男女を賞賛するが、イエスは崇拜する。イエス崇拜は英雄崇拜の最高の形態である。それは偶像崇拜ではない。それは、「すべての人を照らす光が、世に來た」(ヨハネ伝一章九節)のに対して、人間が心から捧げざるをえない正当な礼拝である。そして、イエスの完全性は次の点にある、すなわち、わたしは彼をわが主、わが師として崇拜すると同時に、彼をわが友として持つことができることにある。いかなる人も彼ほどわたしの心に近づくものはない。わたしの父や母、妻や子、いちばんの親友でさえも、彼ほど親しくわたしの心に訪れはしない。彼は最も厳格な判事であり、最も柔和な友人である。たとえどんなに深い墮落の淵に落ちて、援助と同情を求めれば必ずや彼はわたしの手の届くところにいたもう。彼はわたしの内奥の魂を知り、わたしのなかにあるどんなわずかな善のためにもわたしを迎え、わたしのなかに見出す大きな悪のためにもわたしを捨てたまわない。その点において彼はまったく他の人、またはすべての人と異なる。「たとい父母がわたしを捨てても、主がわたしを迎えられるでしょう」(詩篇二七篇一〇節)。

それゆえわたしはイエスを愛する。……彼の完全性の美しさを考えていると、彼がユダヤ人であったことなどは無限の彼方に遠のいてしまう。彼はイギリス人でも、アメリカ人でも、シナ人でも、インド人でも、

西洋人でも東洋人でもよかったであろう。わたしにとつては全く同じことである。彼はひとりの人間、たんにひとりの人間、人間そのもの、「人間」、すなわち「人なるキリスト・イエス」(テモテ前書二章五節)であつて、友人の最も親しきものである。

第二に、わたしはキリストを「人なる友」と考えるのみならず、また「神なる救い主」と考える。わたしは自分のなかに、どんな友情も、神の友情さえも取り除くことのできない、あるものを発見する。そのあるものは、どんな人間的手段によつても除去できない、一つの靈的な病氣であると感じる。わたしはそれを罪と呼べと教えられた。そしてそれはその名で呼ぼうと、なにか他の名で呼ぼうと同じである。罪はたんに罪深い行為とかふるまいだけではない。罪への傾向でさえない。それ以上の何物かである。それは人間性の一部であり、人間性の基礎そのものであるように思われる。人は「火の子が上に飛ぶように」——「悩み」のなかへばかりでなく——罪のなかへと生まれてくるのである(ヨブ記五章七節)。わたしがなぜ、またどうして罪のなかへ生まれてきたのかは知らないし、また知ることもできない。……わたしは罪人である。このことは、たとえどんなに不承不承でも、認めなければならぬ。

この最後の段落など、人間性への冷徹な洞察といい、その罪理解の深刻さといい、類のないものではないか。こ

のあと内村は「それでは、どこに、そしてどうして、わたしは救いを得るのか」と問い、「どういう説明がなされるにせよ、わたしは、わたしの罪の問題の実際的な解決を、神の子の贖罪の死のなかに見出した」と答えて、「わたしはナザレのイエスを「わが主、わが神」として良心をもつて呼びまつる」と結ぶのだが、詳細は割愛せざるを得ない。代りに、次の一文を引いておく。「私はキリストのヒューマニティー（人道感）を深く探れば探るほど、彼の神なることをさとりませす」（注9—220）。

### 「福音的人間」内村のヒューマニティー

六七歳（今なら八五歳か？）の老人が書いたとはとても思えない何ともみずみずしいこの論考は、内村のヒューマニティーを語り尽している。もうこれで十分なのだが、私の話は実はこれを出発点として、私なりにヒューマニティーの面から内村を観察し、私なりに彼の人間性をその言葉の中に探ってみようとするものである。「およそ人間味において欠けたる者が宗教的に偉大なるはずはない」（注17—208）のだから。

### 友情の人

内村の「人間味」を語るに当たってその友情から始めるのは、彼がイエスを「わが友、最も親しき友人」と呼ぶほどに友情の人だと思ふからである。内村は若

き日八人の友人たちと共に宣教師M・C・ハリスから洗礼を受けた。その時それぞれ自分にふさわしい洗礼名を付けたが、内村はヨナタンを選んだ。それは自分が「友情の徳の主張者で、ダビデに対するヨナタンの愛に注（4）、いたく動かされていたから」（信2—18）であったという。のちにアメリカ滞在中ワシントンで、偶然知り合つて生涯の友情を結んだアメリカ人実業家の名前は奇しくもデビッド・C・ベルであった。彼らの交友は、聖書の故事から生まれた「David-Jonathan Friendship」の美しい実例の一つとなった。

友情の顕著な表現に文通がある。内村は多くの手紙を書いた。そして多くの友人たちが彼の手紙を保存した。その代表的なものがこのベルであり、同室の友宮部金吾であり、弟子のひとり斎藤宗次郎であった。私の恩師山本泰次郎（一九〇〇—七九）はこれらによって「書簡による内村鑑三伝」三部作を書いている。注（5）内村は「ピレモン書」注解の中で英語の「コレスポンデンス」を解説し、「愛の反応これ文通の意なり。吾人は書簡によりて吾人に対する友人の愛情を知らんと欲す。もし世に愛の福音なるものあらば、これ書簡文を除いてあらざるべし」とまで言っている（注14—61）。私はかつて友人たちと共に「聖書語学通信講座」注（6）で働いたが、この言葉に励まされたことであつた。

内村の友情の秘訣は、言うまでもなく「わたしはあなたに（弟子たち）を友と呼ぶ」（ヨハネ一五・5）と言

われた。主イエスにあった。へイエスは単独であった。ゆえに万人の友であった。友多きをもって誇る人は幸福である。しかしながら友なきをもって嘆く人はさらに幸福である。人はただ一人になって万人を友とし得るのである。(注10—230)。内村には多くの弟子があった。しかし彼は、親鸞と同じく(私は弟子は一人も持ちたくない)として言った。(最も尊い関係は師弟関係にあらざして友人のそれである。永久に消えざる者は「キリストにある友」である。(信23—209)。

## 人生論

始めに私はきょうの話を私の「切実な」表白と言ったが、それは私にとつて内村を読むことは決して「内村について学ぶ」ことでなく、すべて「内村から学ぶ」ことであつたからである。注(7)私は年少の戦争世代で軍国少年として育ち、二年足らずの軍隊体験のち、戦後の混乱と個人的事情もあつて、まっとうな教育を受ける機会もなく成人した。そのような人間にとつて、山本泰次郎先生に出会い、先生を通して知った内村と、野村実先生と、先生を通して知ったアルバート・シュヴァイツァーは、実に人生いかに生くべきかの師であり、私の人間形成の師匠方であつた。「汝の若き日に汝の創造主を覚えよ」(コヘレト一二・1)と言われるが、若き日にこれらのもつたいないような偉い先生方に出会って福音を学んだことが、いかに幸いなことであつたか、思い出すに今なお胸の高鳴るのを覚えざるを得ない。

内村にはその名も(人生のABC)(信20—268)と題する文章をはじめ、(ゼントルマンのなさざること)(信8—114)とか、(わが家の憲法)(信20—53)あるいは(家訓)(同54)というような文章に至るまで、勝れた人生論が多い。(疑問あり煩悶ある時、ただちに解決し得べきものではない。ただ必ず神より解答を賜わる時あるべしと信じて、希望をもって今の痛苦を慰むべきである。いそぐなかれ、あわつるなかれ。神を待ち望め。静かに待望せよ。これ暗中に処する唯一の健全なる道である)(注4—188)というような言葉に人はどれほど深く慰められることか。

信仰の道を歩み始めた時、不安におののく私を力強く励ましてくれたのは、(信仰は冒険である。冒険の無き人生に興味なく、信仰の無き生涯に意義がない。この宇宙に生まれ出でし以上、冒険はまぬかるべからず、信仰は廃すべからず)(信16—45)という、老内村(死の半年前)の言葉であつた。また(肉の事については普通の人たれ。靈の事については特別の人たれ。外は他の人と異ならんと欲するなかれ。ただ内に神の光を宿して、暗き世にありてその暗黒を照らすべし。ナザレのイエスは身は木匠にましまして、靈は神のひとり子にましませり)(信8—42)の一文は、信仰をもって世俗に生きる心得となつた。人生右するか左するか、進むべきか退くべきかの選択、決断を迫られた時には、(成功の秘訣)と題する次の文章に大きな教示を得た。(境遇の強うるところとなりて事をおこ

なえば、その事必ず成功す。みずから境遇を作りて事をおこなえば、その事必ず失敗に終わる。みずから求めずして来る境遇は神の声なり。みずから計画<sup>かく</sup>みて作りし境遇はおのが声なり。成功の秘訣は、神に強いられざれば起たざるにあり。(信7-320)。

そして今、戦争世代としては思わぬ長寿を恵まれ、老いのきざはしに立てば、次の言葉が身に滲みる。(信者の生涯は、始めは悪くして終わりは善くある。終わりに近づくほど、ますます善くある。生命<sup>いのち</sup>の夕暮になればなるほど、彼は何ものか、彼の心の奥深き所に結実しつつあるを感じる。人あり。彼に、その生涯の中に最も愉快なりし時はいつか?と聞くならば、彼は今なりと答うるのである。そうして彼の最後<sup>ラスト</sup>が最善<sup>ベスト</sup>である。彼の生涯の終わりが、彼にとり最も感謝多き時である。そうして彼が特別に感謝してやまざる事は、彼の生涯の計画がことごとく失敗であつて、彼の計画に反せし神の御計画が彼の身において成つたことである。信者にはこんな感謝があるのである。(信8-60)。

**人間味** さて(天に關しての熱心と地に關しての熱心、完全なる人に必ずこの両方面がある)と内村は言うが、この両者を抱いて、しかも(そのいづれにも偏することなく健全に) (注17-208 参照) 生きようとする時、人は内に戦い(一個のわれは他のわれと常に戦いつつある者なり)(信1-70)、外に矛盾なきを得ない(われに大い

なる矛盾あり。われはその事を自認す。われ自身、円満無欠の人なりと言わず。人は何びとも神にかたどられて無限大に造られし者なり。ゆえに矛盾は彼において、まぬかるべからず。矛盾はあえて恐るるに足らざるなり)(信22-192)。

この言わば弁証法的緊張をそのままに(健全に)保持している人間こそが「福音的人間」である。内村は最晩年の論文(楕円形の話)(信22-140)の中で、(真理は円形にあらざ、楕円形である。真人もまた然りである)と言っているが、これは彼が自らの全生涯をもつて語つた福音信仰の消息であると言つてよいだろう。

楕円形は二個の中心をもつ。彼はこの話では(神と人、愛と義、いや神自身が二中心、キリストも人であつて神)と論じている。ローマ書講義で言えば、(DivinityとHumanity、神に關する事と人に關する事、神学と文学)である。さらに思いつくままに、これをふえんすれば、信仰における(自と他)(注11-147)あるいは(内と外)(注6-17)、宗教における(公的と個人的)(注7-118)、愛のJ(英341)のイエスと日本、などなど。

これは内村に特徴的な「『複眼的思考法』とでもいえる」思考方法であるが、ただに思考方法に止まらない「一種の相対的な真理観」(鈴木範久)注(8)、いやむしろ彼のキリスト信仰の中核を示すものであることは、次の一文を読めば明らかであろう。

それはルカ伝一八章（パリサイ人と税吏のたとえ）に付された解説の一節である。〈クリスチャンの謙遜は礼節ではありません。これは謙虚でありまして、心のことであります。自己の真価を認むることであります。自己が唯一の罪人、罪人のかしらであることを認むることではありません。この覚悟なくして、神がキリストによりて下したもうすべての恩恵に接することはできません。最も低くせられて最も高くせらるるのであります。自己を打ち砕かれて新たに自己を賜るのであります。われらはあくまで低くせられて、あくまで高くせらるべきであります〉（注9―218）。

今回私は、その〈人間味〉という観点から内村の文章をあれこれ読み直して、改めて強く感じたことは、内村がいかに謙虚で慎み深く、人間の悲哀を知る人であったかという点と、同時に、彼がいかに明るく乾いていて、健康的で快活な人間であったかということである。この〈われらはあくまで低くせられ、あくまで高くせらるべきである〉という言葉は、そのまま彼自身に当てはめ得るものであると思う。

以下に挙げるものは、それを示す例として私が全く恣意的に拾い出した文章の一部を項目別に並べてみたに過ぎない。しかし、いずれも私の心に刻まれているものである。まず小さなエピソードと小さな詩から始めよう。内村の人間観を最もよく示した著作に『代表的日本人』があるが、

その第一に取上げられた**西郷隆盛**についてのエピソード。〈西郷が衷心から嫌ったのは他人の平和を乱すことであつた。人の家をたずねても、声をかけて、中の人を呼びたてるようなことをせず、そのまま玄関にたたずんで、誰かがひよっこり現われて自分に気付くのを待っていたという〉（信6―40）。内村はこれを〈鋭すぎる感受性〉（同35）と言っているが、これを記した彼自身がそうした感受性に富む慎みの人であつた。

小さな詩とは、これは内村自身の作ではなく、アデレイド・プロクター夫人の“Great”という詩で、内村自身の訳（彼の言う精神訳）〈**偉大なる人**〉（信5―173）が『愛吟』に収められている。二節から成るが一節ずつ読む。〈愛のために至誠まことの心をもて、惜しまず与うる人は大おおいなり。されど、愛のために臆せず物を受くる人は、さらに大なる人と称たたえん〉これはあのパウロの言葉「だれに対しても借りがあつてはならない、互いに愛し合うことのほかは」（ローマー一三・8）をほうふつさせるではないか。第二節〈われは、自由に大過をゆるす気高き人の前に平伏ひれふす。されど、ゆるされて、よくその責に堪うる人は、さらに気高き人と称えん〉これは、しばしば問題になる加害者・被害者間の和解の本義を教えるものではないか。

次に、キリスト教に直接関わる題材を取上げよう。**聖書**から。〈聖書を読んで、永久の利益がある。聖書を読んで、人は老いて老いない。彼の心に永久の春がある。聖書を読ん

で、理想が尽きない。詩と歌と音楽とはその必然の結果として、わが口より流れ出る。聖書を読んで知識欲が増す。宇宙と人生とについて広く深く知らんと欲する欲求がわいて尽きない。もし世に神の言があるならば聖書を措いてほかにあるとは思えない。人類の所有のうちで最も貴いものは書籍であつて、書籍のうちで最も貴いものは聖書である（信11―234）。聖書をこのように紹介してくれる人を、私は内村のほかには知らない。

内村と言えば無教会だが、その内村はごく晩年に**無教会主義**について次のように発言している。〈無教会主義は私の信仰である。これは私の便宜にかなひ、私の性質に合ひ、私の信仰を助くる主義だからである。私は私の無教会主義が私を救うのであるとは思わない。私は教会問題はキリスト教の根本問題であるとは信じない〉（積極的無教会主義）信18―115。〈よりよい名称がないので、わたしはこの形なきキリスト教の形を「無教会主義のキリスト教 Christianity of no-church principle」と呼ぶ。しかし實質には、名称以上のものがある。それは否定的な信仰ではない〉（「ない」の傍点は内村、〈霊と形〉英369）。序でながら、これも最晩年のことだが、殆ど同時期に教会について一見矛盾とも思われそうな次の二つの発言をしている。〈より多くの自由、より徹底したる独立である。一人一教会主義を採るのである。教会の必要なきにいたらざれば、プロテスタント主義に徹底したりということはできない〉（教会諸問題）信18―36。〈無教会主義の

積極的半面は全人類教会主義であらねばならぬ〉（日4―352）。

内村がその死の五か月前の日記に〈久しぶりに**十字架の信仰**に帰り、ひとり心の内で喜んだ。自分にもし「わが福音」なるものがあれば、それは十字架の福音である。これありて、他に何が無くともよい〉（日4―355）と記したことは、よく知られている。その彼はその十日後にこうも言っている。〈唯一の倚頼は完全の人イエスである。少しなりと彼に似んことが、わが最大の努力であらねばならぬ。信者と呼ばれずともよい。しかり「信者」でない方がよい。心、柔和にして謙遜者となりて、わが心に平安を獲ればよい。人生の終わりに近づいて、キリスト教とキリスト信者とがだんだんと、いやになりて、ナザレのイエスのみが慕わしくなる。あるいはイエスに依るヒュ・ト・マニ・テリアン（人道教信者）として死ぬのかも知れない〉（日4―358）

**伝道**について。〈日本国のごとき不信国においては、キリスト教の信仰を維持する事だけが、伝道的に見ては、大事業である。べつに教会を起すに及ばない。多数の信者を作るに及ばない。宗教的大著述をなすに及ばない。一たび受けし信仰を勇敢に頑強に守り通す事だけが大きな伝道事業である。あえて他に伝道事業を企つるの必要はない。内に対しては明白に、外に対しては独立に、一生信仰を守り通して、われらはそれだけにて善き伝道師たり得たのである〉（信17―133）。



私が山本先生に出会って間もない頃、先生は内村の非戦論関係の論文を編集して、内村鑑三著『非戦論』（角川文庫、33）という一書を刊行された。この本によって、私はキリスト教平和主義に開眼し、それを自分の人生の指針として生きてきた。

そういうわけで、内村の**非戦論**については論じたいことが多々あるが、ここではその余裕はないので、次の一文を引くに止めたい。〈私は、非戦論は道理として最も正しく、道徳として最も高く、政略として最も賢い主義であると思います。しかし、その反対の主戦論にもまた多くの採るべきところがあります。少なくとも同情を寄すべき点があります。：：私は、より大なる真理として非戦論を採るのではありません。絶対の真理としてこれをいさぐくではありません。〉（非戦論の原理 信21―93）。

この文章は、内村が決していわゆる主義の人ではなかったことを示すとともに、彼の平和思想が（特に現代のそれから見て）、決して絶対的なものであるわけでもないことを自ずから明らかにしている。何にしても、内村が終生平和主義に生き、平和運動の最も確実なる手段として、福音宣伝に従事した（信21―180）「平和の福音」の使者であつたことは確かである。

ここで少々唐突だが、内村の愛国心を語る次の文章を紹介しておきたい。（一九二七年九月四日（の日記）：：この日また、ある事よりして、日本をわが愛人として愛するの幸福に気付いた。これは青年時代においてわが心を燃や

した愛であるが、老年に至ってこれを復活するの必要を感じる。日本とは、日本政府でもなければ日本人全体でもない。日本という、ある *Mysterious personality* である。これを愛し、これに仕えて、われは無上の幸福を感じるのである（日4―91）。

〈日本という、ある神秘的な人格〉とは異様な言い方である。それが何であるにしろ、私はこれを読んでパウロのローマ書九―十一章の「イスラエル救済史論」を連想せざるを得なかつた。事実、内村は『ロマ書』第四三講（九章一―五節）の「約説」には「パウロの愛国心」という題を付けている（信17―91）。

**パウロ**と愛国の熱情を共有する内村は、彼を愛した。私はイエスを崇拜するが、パウロを敬愛する。だからこそであろう、彼は「パウロ伝の一部」（注11―62）を講じた時、〈付〉として「パウロの欠点について」（同116）語った。その一つに彼のいたずら心を挙げ、しかも彼を弁護して言う。〈使一六・35以下のパウロの振舞いについて〉これはたしかにいたずらである。しかし害のないいたずらである。：：人に必要なるは **ヒューモア** である。世に貴いものとしてまじめなる人の深い笑いのごときはない。誠実が解けて笑いとなりて現われたもの、それがヒューモアである。：：ピリピにおいて彼がなしたることがその一つであつたと思う。私はこれにパウロの人間味を見て喜ぶ。私は「聖」パウロのほかに「人」パウロを知りたい

（同120）これが、パウロを語って内村自らを語ったものであることは、言うまでもないであろう。

特に晩年の日記にユーモア礼賛の記事が散見されるが、ニーチェばりのこわい顔をした大先生は、ユーモアに接して「痛快というよりむしろ涙が出る」（日4・303）という「横隔膜以下の笑い」（斉藤宗次郎）注（9）の人であった。

ここに「ユーモアのない人々 Humourless People」（英430）という英文の一篇がある。「世にはまったくユーモアをもたない人々がいる」と嘆き、「彼らは聖書を文字どおりに解釈することを誇りにしている」と、そういう連中に辟易し、「真理は慎みぶかい処女のように自己を隠すことを好む」のがわからないのかと、彼らを痛烈に皮肉っている。ここには、今でいう「原理主義者」に対する厳しい批判と、宮田光雄氏がイエスの人格について言われた「アイロニカルなユーモア」注（10）が溢れている。

内村の没した昭和初年、金融恐慌あり、治安維持法ありで時代は閉塞的であった。内村自身も「こんな（官尊民卑の改まらない）国民に独立的キリスト教を与えんとして生涯を送りし自分の馬鹿さ加減をあわれまざるを得ない」（二九年四月五日の日記。日・290）とまで言う程に絶望的な状況の中にあった。にもかかわらず、彼はその頃「一樂觀主義者の告白」という英語の一文を綴り、「善い意志が宇宙を造ったのであるから、その終わりは完成でなければならぬ」という終末論的宇宙観に立って、「わたしは樂觀

主義者である。Yea an incorrigible optimist 度し難き樂觀主義者である」（英291）と叫ぶように告白している。

## 文学

せつかく「文学」という言葉が使われているので、付録の意味で、内村の言葉遣いや文章について、気が付いたことを二点指摘しておきたい。

一つは内村の文章の明快さということである。明治の人にしては、その文章は抜群にわかりやすい。先に言及した「懇談会」の折、当然のこのように、内村の文章を読むのに苦労はなかったかという質問が出たが、外国人（韓国からの留学生）も含めて難かしかつたという反応はなかった。むしろ、例えばリズムがとてもいいので、読みやすいということであった。懸賞論文に応募するような人たちと、読むことも勿論あるが、内村の文章は若い人たちにも十分読めるのである。

これは一つには、内村が「伝統的な日本語の優美さを、意識的にねじ伏せることも行なったようである」（亀井俊介）注（11）ことにもよろうが、何と云っても欽定英訳聖書をはじめとする英語の影響が圧倒的であることが考えられよう。しかし何よりも、福音のため、伝道のためという強い使命感が、独特の簡潔で力強い文体（文語体プラス翻訳調？）を生んだのだと思われる。それはまた、「文学とは高尚なる理想の産なり」（信5・6）、「文学の要は思想を残すことにあり」（信1・239）という内村の文学観によることも忘れてはならないだろう。

これと関連して、第二点は内村の文章にキリスト教用語が少ないということに改めて驚く。例えば、「独立」という語はキリスト教の用語とは言えないと思うが、内村の場合はその思想の中核に位置すると言つてよく（例えば「独立信者」、〈独立的キリスト教〉など）、その文中使用頻度も実に〈無教会〉に並ぶ程である。

一方「礼拝」とか「説教」という語の使用は極端に少ない。内村は日曜日の集會を「礼拝」と呼んだことはないのではないか。そもそも新約聖書において「礼拝（する）」を意味する語は、神、キリストの前にひざまずいて尊崇の意を表する行為を言うもので、「礼拝」と言い慣らされているいわゆる「礼拝式」とは関係はない。内村にとつて、〈礼拝〉とは「靈と真理をもつて神を礼拝する」（ヨハネ四・26）ことであり、全生活において「自分の体を神に喜ばれる聖なるいけにえとして献げる」（ローマー二・1）こと以外の何ものでもなかった。ここに「無教会主義」の真髓がある。

また「説教」と言わずに、〈聖書講義、聖書の研究〉と言つたのも、「礼拝」の場合と同じく、自分の行つてゐることは「教会の典礼、礼拝式」（リタージュ）の規範には適合しないことを、よく知つての上での慎みから出たもののように思われる。それはまた彼の自負でもあつたことと言ふまでもない。

近來こうした内村の用語に対する疑問、批判を聞くが、それじたいは当然であるにしても、改変を主張する人には、

少くも内村以上の慎みと見識とが求められるであろう。（12）。

**福音的人間の使命**　ここで私はもう一度、前述の内村の謙遜觀に注目したい。彼は言う。〈謙遜とは心の謙虚のことであつて、自己の罪人であることを覺認して、最も低くされることである〉と。

ひるがえつて現代の世界を覆う混迷を思う時、その依つて來たる原因は詰まるところ畏るべきものに対する畏れを知らぬ人間の驕りではないか。しかも、その驕りの極めて現代的な特徴は、誤解を恐れずに言えば、実は〈神にかかわる事〉の驕り、〈心の謙虚〉の喪失ではないのか。宗教の驕り、靈の驕り、もつと端的に信仰の驕りである。信仰の熱狂<sup>フレイマ</sup>が戦争と暴虐を引き起こし、宗教の陶醉<sup>エキスタシ</sup>がテロと悲惨を生み出しているのは、それではないか。

そうであれば、〈深刻に人らしく〉ありたいと願う福音的人間の使命たるや、まことに重いものがある。ここに内村のヒューマニティーを雄弁に語りつつ、福音的人間の使命を示すに最適と思われる一文（〈祭司とは何ぞ〉より、信14・137）を読んで、本論のしめくりとしたいと思う。

人はすべて、神が彼を置きたまいしその地位にありて、善き祭司となることができる。まずナザレのイエスに教えられ、神の心の何たるかを知り、その、愛であつて、恐怖でないことを知り、その、おのがひとり

子をさえ惜しまずして与えたもうほどに、人を愛したもうを知り、同時に、また自己を知り、おのが罪を知り、これを除くの道を知り、悲痛かなしみを知り、艱難を知り、これによりて同情を知り、慰藉の術を知り、平和獲得の秘訣を知りて、われら何びとも、神と人との間に立ちて、神を人に紹介し、人を神に導きて、祭司の聖職を果たすことができる。これまことに人として最もふさわしき職である。

併せて、この話を準備しながら私の胸中に去来した次の聖句を引いておく。

主よ、あなたは我らの父。わたしたちは粘土、あなたは陶工。わたしたちは皆、あなたの御手の業。(イザヤ六四・7)

### おわりに―「内村鑑三の現代性」

これまでに話したことと関わってではあるが、一応別のことを三点述べて結びとしたい。

最近、と言っても一年程前のことになるが、この今井館の集りで時折お会いする江端公典氏が『内村鑑三とその系譜』(日本経済評論社、'06)という興味深い本を出された。「内村鑑三の現代性」は、その「序」の表題をお借りしたものである。

内村の系譜ということについて、私は大いに關心はあるが全く不案内なので、いまこの本の内容から何かを申しあげるというのではないが、拝見して気付いた内村の文章があるので紹介したい。それはルカ伝講義の中の「弟子の選定」と題する話の一部である。〈福音もとより万人に對するものなりといえども、なかんずく特にいかなる人々に適するか。いわく常に人生の事実をもつて問題とし、しかも独立の地位を確保せる人々である。手をもつて日々の労働に従事し独立の生業にいそしむの人、かかる人が最も福音の性質に合体するのである。∴∴∴キリスト教の *genius* (向き) がかしこにあらざしてここにあるのである。ペテロ、ヨハネらをもつて代表せられし人々が最もよく福音を受くるに適しているのである〉(注9・89)。

先程の内村の用語にも関係するが、〈キリスト教の *genius* (向き) それも「向き」という訳語をもつて言った人は、彼のほかにあまりいないのではないか。素人の直感で言うのだが、この一語には正に内村のキリスト教の特質 ( *genius* ) が明示されているばかりでなく、その思想的・社会的系譜までもが暗示されているように思われて、甚だ興味ふかい。

そしてさらに、あえて言えば、内村の系譜に属する人間は、内村のこの言い様の中に、新しい時代に生きる自分に對する、新しい使命への呼びかけを聞かなければならないのだと思う。

内村の愛した言葉に「平民」がある。彼は早くからこの言葉を使い始め、死の三か月前にも日記に、「イエスは平民である。自分はイエス・キリストのしもべである。ゆえに平民である」と記した（日4・380）。内村のヒューマニティーを語るのに「平民」以上の言葉はなく、彼の「人間味」を映すのに「平民の思想」にまさるものはない。

しかし、これはこれで一つの独立した大きなテーマであるし、私個人としては不束かながら既に語ったこともあるので注（13）、今回は一切割愛した。ただ「内村の現代性」について「彼が種々の憲法上の問題とかかわっている側面を考えないわけにいかない」という江端氏の言葉に触発されて、次の一点を指摘しておきたい。

端的に内村の「平民」に当たる現代の言葉を探すと、残念ながら日本語の中には見当たらず、英語の「people」が最適であるように思われる。内村自身晩年の英語の論文では、一再ならず「私は普通の人々（コモン・ピープル）を愛する」（英312、421）と言っている。

そして「ピープル」と言えば、それは「日本国憲法」前文に八回も繰返し出てくるあの「ピープル（日本国民）」である。憲法は日本のピープルの憲法であり、主権者である日本のピープルが、日本のピープルのために自ら確定したものである。そうであるのに、甚だ遺憾なことながら、現況はその憲法が空洞化を通り越して改廃の瀬戸際に立たされている。

八十年も前に、内村は「日本人はいまだ純平民たるの尊

さを知らない」（日4・290）と嘆いた。私どももまた、日本人が大いなる摂理によって自らのものにしたはずのこの貴重な憲法を有しながら、いまだピープルたるの自覚に乏しいことを嘆かざるを得ない。内村の平民の思想をして、日本人を真のピープルたらしめよ、と切に願う。

最後に、内村晩年の英文論考「**新文明 A New Civilization**」（英296）を拾い読みして、話を終わることにしたい。

内村は『聖書之研究』発刊以降三十年にわたって、聖書の研究とキリストの福音の宣伝に専念した。「天に關し最大の興味をいだくに至りし彼は、もちろんのことへ地と人とに關する熱心」をも等しく持ち続け、その一つの「結実」として、死の三年前にこの論文をものしたのである。これは彼の「非戦論」の延長線にある文明論であり、「人類の幸福と日本国の隆盛と宇宙の完成を祈る」（注（14））という彼の最後の祈りにつらなるものと言えよう。私は、これは「キリストにある（私どもの）友」からの、厳しくも愛に満ちた私どもへの遺言状であると思っている。では、この論文の次の段落から始めよう。

みづから預言者や使徒の正当な継承者と称する西洋人は、永久に続くキリスト教文明を樹立したと思ひこんだ。しかしそれは、バベルの塔にほかならなかった。神はその支持者の間に混乱の靈をおくった。東洋のわれわれが驚いてみている間に、巨大な建築は崩壊し、

そのまま永遠の荒廢のうちに放置されている。

内村は決して預言者ではないが、9・11を経験した私どもにとつて、これは何とも默示的な文章ではないか。

彼はまず、「文明がもし何らかの意味をもつものとするば、それは西洋文明のように強力な軍備に守られなければ存在しえないようなものでなく、預言者イザヤの「平和預言」(イザヤ書二章四節、一一章六、九節)が明示したような、戦争のない世界の状態でなければならぬ」と論じてる。次いで、日清、日露、第一次大戦の三度の戦争に勝利して驕る「わたしの愛する祖国」を厳しく批判し、いまや日本の国民は「全世界の愛を失った」と警告する。そして「今こそ」と、彼は熱誠をこめて勧めるのである。

日本は眠りから醒めるべきときである。膨大な軍事予算をとまなうこの西洋文明は、完全に放棄されなければならぬ。日本は新しい文明を、真に文明であるところの文明を始めなければならない―それは戦争のない文明であり、「キリスト教的」欧米の指導者となるような文明である。

内村が没して今年は七十八年になる。残念ながら今なお彼の期待に答えられないでいる「わたしの愛する祖国」のために、内村はなおも切々と祈る。

わが日本が国家的宣言を發して、五十年前武士の武装解除をしたように(一八七六(明治九)年の廢刀令)国家の武装解除を宣言し、こうして全世界に新文明を招来しうるなら、それはなんとすばらしい日であろう。わたしがこれらの言葉を綴りつつあるとき、ユダヤ人イザヤの他の預言がわたしの唇に浮かび、わたしに書かせるのである。

ヤコブの家(日本)よ、  
さあ、われわれは主の光に歩もう。(イザヤ書二章五節)

本稿は二〇〇八年三月二三日の「内村鑑三記念キリスト教講演会」のために用意された原稿を若干添削し、以下に必要と思われる注を付したものである。当日の話は時間の制約のため大幅に省略せざるをえなかった。

注(1) 内村の文章の引用は「〜」印とし、すべて教文館版『内村鑑三聖書注解(注)』、信仰著作(信)、日記書簡(日)全集』(‘60、‘66)に依る。(信23、211)は信仰著作全集第二三卷二一―二二ページの意。以下同じ。傍点は筆者。

(2) 『内村鑑三英文論説翻訳篇 下』(岩波書店、85)

(英373)は本卷三七三ページの意。以下同じ。

(3) 『Japan Christian Intelligencer』一九二六・三、二八・二に刊行された内村主筆の英文月刊雑誌。

(4) サムエル記上一八・1参照。

(5) 『内村鑑三―ベルアートの書簡』(新教出版社、'49)

『同―宮部博士アートの書簡による』(東海書房、

'50)、『内村鑑三とひとりの弟子―斎藤宗次郎

アートの書簡よる』(教文館、'81)。

(6) 『無教会史』第四期連帯の時代』(新教出版社、

'02) 二二四ページ参照。

(7) 「ついで」と「から」の表現は、「第三〇回内村

鑑三研究会」('07・9・17)における原島正氏

の「報告」から受けた教示に依る。

(8) 『内村鑑三日録12万物の復興』(教文館、'99) 四

四七ページ。

(9) 『ある日の内村鑑三先生』(教文館、'64) 二六〇

ページ。

(10) 『キリスト教と笑い』(岩波新書、'92) 九一ペー

ジ。

(11) 『内村鑑三―明治精神の道標』(中公新書、'77)

一三八ページ。

(12) 当日配布の「要旨」には、このあとに内村の文学

性の例示として次の二つの詩の題名を挙げておいた。

(桶職) (信22―351)、

(わが家の赤ちゃん Our Baby) (英311)。

(13) 内村記念・沖繩講演「内村鑑三における平民の思

想」(『からしだね』一九八九年秋五二号、'89)。

(14) 政池仁『内村鑑三伝』(教文館'77) 六二九ページ。

(所載) 「無教会研究」第11号 二〇〇八年十一月

無教会研究所